

# 短説の会へのレクイエム

〔上〕 (1)～(2) 〈全6章〉

西山正義

## (1)

今日は令和元年（2019）7月20日である。つまり、『短説』休刊から満10年が経ったわけだ。

われらが短説の会の創始者であり主宰者である芦原修二さんが、平成21年（2009）6月21日東京座会の帰途、柏駅のホームで電車接触事故に遭い、それを契機に、翌月7月21日付の書面で、文学結社の命である機関誌、月刊『短説』の休刊が発表された。

雑誌の形として体裁を整えた月刊の『短説』は、昭和62年（1987）2月に行われた第18回座会（当時はまだ東京の神田神保町座会しかなかった）の「作品綴り」を冊子にまとめ3月号と表示したのに始まる。

その際、昭和60年（1985）9月の第1回座会から17回までの各座会の「作品綴り」と、それらとは別に雑誌の形で発行した季刊『短説』2冊をあわせて通巻20号とし、以後月刊化したのが雑誌『短説』である。

以来、平成21年までの24年間、発行が大幅に遅れたり、合併号になることはあっても、休むことなく発行し続けてきた。その時々に応じて、同人の何人かが編集や校正に加わったりし、平成15年の7月号以降は数人の同人による編集担当制度が導入され、内容面でも実務面でも大きな成果を上げた。

しかし、発刊以来常に最終的な編集作業は芦原修二さんの双肩にかかっているのには変わりなく、それどころか、発送等の雑務までほとんど一切を芦原さんが行っていた。

その限界に突き当たったのが、芦原さんの健康上の問題であった。いや、もっとはっきり言えば、高齢化である。そこへ事故である。

それで先の通り、平成21年7月21日付で、芦原修二さんより全会員に向けて、短説の会として印刷物制作の中止が発表された。それは直ちに発効され、その時点で編集が完了し、刊行を待っただけになっていた平成21年3月号（通巻281号）を最後にその発行が停止された。

因みに、その最後の号は僕が編集したもので、すでに4ヶ月も発行が遅れていたわけだ。次の道野重信さん担当の4月号はグラ刷りまで完成していたが、未刊のまま。さらに、すだとしおさん担当の6月号に当たる年鑑特集号も編集作業は進んでいたが、頓挫したまま

である。

それから、10年経ったのだ。

今更、どうなるものでもない。

短説の会の外部の人にはどうでもいいことだろう。いやそれどころか、かつて会に属していた人たちにとっても、もはや、どうでもいいことかもしれない。たぶんそうなのだろう。僕がこれだけ声を出しているのに、まるで反応がないのだから。

(その反応がないのは、かつてはパソコンとりわけインターネットがネックになっているのだろうと思っていたが、今や、そもそもこの世にいない人も多いからではないかという恐ろしい事実突き当たるのである)。

しかし、それでも、その後の顛末を、やはり文章に記しておきたい。

初出：令和元年（2019）7月20日「短説ブログ」

<http://tansetsu.cocolog-nifty.com/words/2019/07/post-827ff8.html>

## (2)

芦原修二さんから届いた「『短説』休刊のお知らせ」には、  
「これを機に『短説』の発行業務を休み、まったく新たな構想で新体制に入ることに決心しました」

とあり、

「今後は芦原の健康状態を考え、皆さまの作品を印刷物として制作することは中止し、インターネットのホームページ等で作品を読めるように工夫しようと東京座会の考えをまとめました」

と結ばれていた。

雑誌の発行停止はやむなしと思えた。短説の会ナンバー2のすだとしおさんにしても、おそらくナンバー3といってもいい個人集の単行本刊行に最も熱心な秋葉信雄さんにしても、月刊誌の発行を引き継ぐだけの余力はない。若手のリーダー二人、藤代日曜座会を牽引する吉田龍星さんにしても、最も若く才能豊かな関西座会の道野重信さんにしても、地方には「本部」の業務である雑誌発行を引き受けることはできないであろう。

もしかしたら資質的に最も適任だったのは僕かもしれない。ML座会は担当していたが、雑務がいろいろあるリアルな座会運営からは外れていたし、もっと本質的なところで、その性格や資質の面で。しかし、自分からは声を挙げなかったし、そのような話を振られることもなかった。

おそらく、芦原さんには、誰かに会の本部の運営を引き継いで、人に任せる気はこれっぽっちもなかったのであろう。なんとなれ、短説の会は、最初から最後まで芦原修二さんの会だったといえるのである。

ともかく、機関誌の発行停止は致し方ないとして、会を解散するのではなく、次なる展開に移行しようと意志されてはいた。

すなわちインターネットの活用である。これは僕も望むところであった。2000年の秋以降、日曜日は毎週ソフトボールをしていて、他にも地域のさまざまな行事を手伝うことになり、僕は日曜日の座会には参加できないのであった。また、平成21年当時は土曜日は仕事であった。かといって平日に、遠方の座会に出席するのも難しい。しかしインターネットであれば……。

ところが、その年の暮れ近く、僕のもとに届いたのは、各座会の昔ながらの「作品綴り」（つまりワープロで印刷された各作品をコピーしたもの）をまとめただけの「回覧雑誌」だったのである。原始時代に戻ってしまったのかと思った。これにはもう僕は絶望した。インターネットに移行するだけの技術がまるでないのだ。

ただ、インターネットの世界は、その後特にSNSの登場・発達・普及によってめまぐるしく変遷していて、10年前の平成21年当時はまだYahoo!のメーリングリストが無料で使えたのが、その後サービスを終了してしまった。

短説の「メーリングリスト座会」は最初、水南森（五十嵐正人）さんの提唱で始められたものだが、2000年4月の開始当初はniftyで提供されていた有料のサービスを利用していた。翌年21世紀に入り、その機能や利用法の紹介と実演が、平成13年3月の短説15周年全国大会で披露された。その後niftyのサービス終了を受けて、西山正義がYahoo!の無料サービスを利用して運営に当たった。

そのML座会は、リアルな座会とはまた異なったやり方ではあるが、座会として（すなわち、作品を提出して、合評会を行うという）機能だけでなく、短説の会の情報や意見交換など会の運営にも威力を発揮した。

しかし、いかんせん参加人数が限られていた。はっきり言ってしまえば、当時、全会員が電子メールアドレスを持っていて、さらにそれを使いこなし、ML座会に参加してくれていたなら状況は変わっていたであろう。

ただしこのYahoo!メーリングリストも、そのサービス自体が2014年5月28日で終了となる。そうなる行き場を失うわけだが、もうこの頃になると、現在あるさまざまなSNSが登場しているので、みながMLに慣れていれば、他のSNSに乗り換えることは容易なことであつたらう。

SNSとはソーシャル・ネットワーキング・サービスの略で、現在では多種多様なサービスがあるが、要するに「インターネットを経由して人と人が交流できるサービスの総称」で、ウィキペディア（Wikipedia）では第一に「Web上で社会的ネットワーク（ソーシャル・

ネットワーク)を構築可能にするサービスである」と説明されている。これは短説の会にもってこいではないか。使わない手はない。誰もがそう思うはずである。

21世紀を10年以上過ぎた現在において、何らかの組織的な活動を行うなら、SNSの活用無くしてはあり得ないであろう。SNSは現在さらに進化し、パソコンよりむしろスマートフォンでの活用の方が主流になってきて、最新の各種SNSはパソコン向き(つまり短説向き)ではあまりないが、広義のSNSサービスでいえば初期型のいわゆるウェブ掲示板やブログなどは平成21年当時すでに相当に普及していたのである。

最も簡単なのはブログである。一つのブログを共有するのでもよいが、手っ取り早く各人がそれぞれにブログを開設し、そこに作品を発表し、もし通常の座会のように「点盛り」をしたければ、期日を決めて一斉にアップし、点盛りや批評は共用の掲示板を使えばよい。

インターネットのホームページの最大の特徴は「ハイパーリンク」にあるので、公式サイトがその要になり、各個人のブログをリンクで結び、ネット上に短説の会のコミュニティを構築すればよいのである。

そしてそれは、それほど難しいことではない。と、思っていたのは僕だけだったのでしよう。あるいは、僕と同世代かそれより下の短説の会では若い部類に入ることごく少数の者だけだったのでしよう。

もちろん、芦原修二さんも世の中そういう流れにあるというのは分かっていたはずで、だから今後は「インターネットのホームページ等で作品を読めるように工夫しよう」と模索する意思はあったのだが、結局、そういう方向に、文字通り「一歩も」踏み出すことができなかったのである。これが、短説終焉の直接の理由である、と僕は思う。

その他にも間接的な理由がいくつかあると思うが、それより、おそらく本質的な理由はもっと別なところにあるのだろうと思う。そしてそれは、文学結社としてむしろ自然な流れなのかもしれない。

初出：令和元年(2019)7月23日「短説ブログ」

<http://tansetsu.colog-nifty.com/words/2019/07/post-17e7c4.html>